

アトモスフィア

自然科学行政と大学の専門教育

八木 達彦*

ある委員から生化学教育について寄稿しませんかとお誘いを受け、一筆したためることにした。筆者は生化学専攻ではない学科で生化学の授業を何十年も続けているが、生化学への興味や熱意の個人差が大きい集団なので、どのレベルの学生をターゲットとして授業を進めるべきか迷いの連続であった。また年とともに平均レベルの低下傾向が感じられ、悪評高い《ゆとり教育》の影響がもろに出たと感じている。この問題でいろいろ調べていたら、実によいタイミングで学術会議から《これからの教師の科学的教養と教員養成の在り方について、2007年6月22日》という立派な提言が出ていたことを知った。教師の科学的教養を高めることで子供たちの科学への興味と関心をひきつけることが理科離れ、長期学力低迷に歯止めをかける解決策だが、いかにして教師の科学的教養を高めるかの具体案である。ぜひ実現して欲しい。委員会のホームページ (<http://www.scj.go.jp/ja/info/iinkai/kyoshi/index.html>) を直接読んでいただきたい。文教行政に影響のある先生方が圧力をかけて現在の惨状を改めさせるのが唯一の解決策、入学生の学力不足に驚いた大学の先生方が高校の復習を教授するのは緊急避難の措置として仕方がない面があるとしても本末転倒であろう。初等教育については上の提言にお任せし、ここでは自然科学を専攻する学科の教育について私見を述べる。

生化学に限らないが、新規なプロジェクトを立ち上げてそれなりの成果を挙げた先生方がよく述べられるのは、文部科学省のお役人に前例のないプロジェクトを説明して予算をつけてもらう苦労話である。高等教育を受けた立派な審議官の方々にとって、なぜ自然科学の進歩に不可欠な新規プロジェクトの理解が困難なのだろう？あるいは《ゆとり教育》の導入時に、数学や理科の基本とも言える原理や法則が学習指導要領からどんどん削られ、《これでは自然科学の基礎学力が保証できない》という声が上がっても、なぜ強引に既定方針を貫いてしまったのだろう。面子にこだわったというレベルではなく、本気で正しいと信じたからに違いない。この原因は、お役人たちが自然科学の本質を教育されていなかったからではないかと思われる。しかしよく考えると、自然科学を専攻する有名大学の卒業生は、研究者、あるいは研究統括責任者にはなっても、文部科学省のお役人になって文教行政を動かす立場に立つ人は少ないようである。筆者が卒業した化学科の卒業生名簿(1999年版)を探しても文部省の審議官はいなかった。他の学科も似たようなものであろう。自然科学専攻学科では、研究能力を高める教育はしても、日本の科学行政を取り仕切ろうという気持ちをもたせる教育はしない。自然科学の専門家を送り込まずに「お役人はサイエンスの本質を理解してくれない。」と嘆いても仕方がない。

化学科なり、生化学科なり、高度な研究能力を身につける教育の先端を行く著名大学で、何十人もいる学生や院生のうち、文部科学省に入って日本の自然科学行政を改善しようという気持ちをもつ卒業生が2~3年に1人は出るような授業なり、カリキュラムは設定できないだろうか？できればドクターコースで研究実績があり将来を期待される優秀な学生の中から役人志望者が出るような動機付けをする教育が必要である。現職の審議官に科学教育行政の仕組みや問題点を《科学行政論》として講義してもらうのもよいだろう。同時に文系、行政系の学科でも自然科学に目を向ける教育を進めて欲しい。何とんでも日本の科学教育行政における文部科学省の影響力は絶大である。この絶大な力の構成要員が自然科学についての豊富な知識と高い識見をもち、新規プロジェクトの審査、科研費の配分などで理にかなった行動をとれば、日本の自然科学の将来は明るいものになるであろう。

*静岡大学名誉教授、日本生化学会評議員、日本化学会員、アメリカ化学会員